

# モンテーニュにおける理性の2重性と

## その現実認識の構造\*

——宗教改革と宗教戦争とをかれはいかにうけとめたか——

高 橋 誠

### I 問題の所在

モンテーニュ (Michel de Montaigne 1533~1592) の思想を解明するためには、作業の一環として、かれの現実認識の構造を明らかにしなければならない。これをこの小論の課題とする理由の第1に、モンテーニュがストア主義から懐疑主義をへてエピクロス主義<sup>1)</sup>へとその思想の主潮を展開させていく動因とその論理とが、かれに独自のある価値意識<sup>2)</sup>、あるいは、かれの思想の方法、などにもまして、その現実認識の構造に規定された、と考えられるからである。第2には、モンテーニュの思想に分析をほどこせば、おそらくは他の思想一般がそうであるように、それは、まず、自己がそのうちに置かれた現実——生活・社会・文化環境など——に関する認識、つぎに、これにもとづいたかれに独自の態度決定<sup>3)</sup>、最後に、この認識の獲得から態度決定へとそれぞれにいたる思惟方法<sup>4)</sup>、などに分けて考えることができるからである。したがって、モンテーニュの思想を再構成しようとするとき、これは、不可欠の作業なのである。

ここに扱おうとする現実認識の構造とは、この思惟方法を駆使して、モンテーニュが、宗教改革(フランスではほぼ1510年代の前半にはじまる)とそれに続くイデオロギー闘争としての宗教戦争(1562~1598)

\* この小論は、一橋大学教授坂田太郎先生からの多くのご示唆をえて作成された。ここに、これをするして同教授に感謝の意を表する。

- 1) 各期のこれら名称は他の表現も許される。「エッセー」の巻章によってこれを例示すれば、I. 2~23, 27, 32~48, II. 1~6 (1572~1574)→(II. 12)→I. 26, 28, 29, 31, 53, II. 7~11, 16~37 (1576~1580) III. 1~13 (1586~1588)
- 2) すぐれて倫理的な、神と隔絶した人間の生きかたにかかわる。また宗教的にはさしあたって旧教の守護といえよう。その倫理の目的は人間個の救済とそのより充実な自己実現にある。これの形成は *Les oeuvres morales et meslees de Plutarque, traduit, par Amyot, 1572* の読書に多くを負う。
- 3) これはその現実認識の構造に規制されてなされた価値意識の現実化である。
- 4) スコラ哲学の伝統的な思惟方法、これと正反対の復興した古典の合理的な思惟方法と心理分析、との混淆であるといえよう。

とを、どのようにうけとめたか、というその内容である。そして、この課題を追求する素材の範囲を、モンテーニュが 1576~1580 年にかけて執筆した<sup>1)</sup>とされる「エツセー」第 2 巻第 12 章「レモン・スポンの弁護」に限定する<sup>2)</sup>。

## II 理性の 2 重性

理性のモンテーニュによる考察は、そのまま、かれによる現実の考察につらなる。かれの現実認識の構造は、理性をその 2 重性において把握するところに築かれている。まず、理性の 2 重性を明らかにしたい。

モンテーニュはいう。《a)…われわれの人間の諸理性 (nos raisons et nos discours humains)<sup>3)</sup>は、鈍重で不毛の質料 (matiere) のごときのものである。神の恩寵がその形相 (forme) である。それらに方法と価値とを与えるのは、神の恩寵である<sup>4)</sup>と。人間の理性は、それに神の恩寵が宿るとき、理性としての有効性を荷いて、他方、神の恩寵を欠くとき、その理性は、それとしての目的を実現しえない不毛性に陥る。人間の理性のうちには、理性としての目的実現の可能性が内包されている。これに神の恩寵が運動因としての働きかけを行うとき、はじめて、人間の理性は、その可能性を現実化する、ということの意味する。それゆえ、モンテーニュのうちにあるのは、本来単一である筈の理性が、《人間の》という修飾語の限定をうけるとき、このテキストにおけるように、複数で使われるときがある。理性の複数性は、《a)…この偉大な共通の道を失するやいなや、理性は、ばらばらになって、様々の何千ともない途に散逸する》(580) ということを含意する。これは、16 世紀におけるあらゆる領域での活力ある人間精神の動きを反映するものであるが、モンテーニュにとっては、評価の対象とはなりえずに、それは、いまだ目的の実現を果たさない質料、つまり、可能態としての無定形な理性にすぎないのである。他方、この《共通の道》とは、《平常の道》あるいは《ローマ教会 (l'Eglise) によって踏み固められた道》(580) であるから、ここでいう形相としての神の恩寵は、カトリックの教義に従い、それへの信仰告白を行うことによるのみ保証されるそれに限定される。したがって、理性に《方法と価値》とを与えるこの《共通の道》を無視すれば、《c) 理性にとって、充分に明白であるような事柄は、ひとつもない》(494) ことになる。それゆえに《a) われわれのうちにあるすべての理性を信仰に伴わせなければならない》<sup>5)</sup> (484) というのである。

1) Villey, p., *Les sources et l'évolution des Essais de Montaigne*, Hachette, 2éd., 1933, T. 2. pp.375~382

2) この章に限定する理由については、この章が、この課題追求に格好の素材を提供していること、その思想変貌の過渡期にかけて執筆されていること、かれに独自の思想の芽生えを示していること、のみをさしあたってはしるしたい。

3) モンテーニュにおいては、discours は raison の意義をもっている。なお、Kant においても、モンテーニュにおける raison humaine とはほぼ同じ意義をその一義とした diskursive Vernunft が使用されている。

4) *Essais de Michel de Montaigne*, texte établi et annoté par Thibaudet, A., Bibliothèque de la Pléiade, 1950, pp.491~492. 以下 (631) のごとく略記する。テキストの冒頭におかれる a) b) c) は、それぞれ、1580, 1588, 1595 年の、各版の、テキストを指示する。

5) ここで、モンテーニュの宗教が旧教である、と速断してはならない。1562 年にカトリックの信仰告白を行っているにもかかわらず、かれの宗教が、カトリックであるかプロテスタントのそれであるか、あるいは、理神論であるか、については、いまだ未決のまま残された疑問点である。

このように、理性をふたつに分ける考え方は、アリストテレス主義をその主要な方法とした従来のスコラ哲学に由来する。それは、存在を質料と形相とによって規定するのをうけて、理性をこれらの2要因によって把握する方法に示されている。《スコラ哲学の精神上の諸習慣は、スコラ哲学の反対者であるときから宣言するこれらの人びと（16世紀のイデオログたち—筆者）においてさえ、残存している》<sup>1)</sup>なのであって、これの残存している、という点において、モンテーニュもその例外たりえなかった。すなわち、それは、理性を、人間のある本質的属性、つまり可能的な存在である質料と、その形成力としての神の恩寵、つまりこの質料を完全な現実態に化すところの形成力としての形相との、結合・乖離において把握している点、にみられる。

《理性の2重性》とは、モンテーニュにおけるこのような理性観の基礎を指示したわれわれの仮名である。

### III 宗教改革とその原因

理性をこのような2重性において把握するモンテーニュは、16世紀における宗教改革とそれに相即して現出した社会的無秩序とが、神から乖離した理性に起因する、と判断する。この判断は、次のような論理でなされている。つまり、それは、第1に、宗教改革をひき起したのは人間の傲慢(*orgueil*)であり、第2には、この人間の傲慢を基礎づけたものは、神の恩寵による方向づけを失った人間の理性である、という論理である。

モンテーニュはいう、《a) 人間を普通一般の道から放り出し、諸もろの革新 (*nouvelletez*) への志向を抱かせたのは、まさに、この傲慢であり、そして、永遠の罪への道に踏み迷い抜け道を失った人びとの指導者になったり、誤謬と嘘偽との説教者になることを、人間に好ませて、他者の導くままに真理の門弟になることをいとわせたのは、まさに、この傲慢なのである》(553)と。このことばは、宗教改革を評したモンテーニュのもっとも鮮明にして直截的な表現のひとつである。かれは、原始キリスト教へ復帰し、それにもとづいてカトリック教会の改革を意図した動因が人間の傲慢に由来する、と判断する。《ローマ教会をして、その王国の大きな部分を失わせ、とりかえしのつかぬ損失を与えた》<sup>2)</sup> 宗教改革が傲慢に起因するだけでなく、それは、ローマ帝国の崩壊はいうまでもなく、《a) 傲慢 (*orgueil*) は人類の滅亡であり、その墮落》(553)でさえある。フランスにおけるカトリック教会の崩壊の程度については、モンテーニュ自身、《a) 正統にして中正な軍隊のなかから、宗教心の熱意によってのみ赴く人びと、さらに、ただ国法の守護ないしは王への奉仕のみを意図する人びと、をひき出すとしたら、それらの人びとで、完全な1小隊を作ることもできないであろう》(487)と証言している。

この事実が、積み重ねられる多くの屍とともに、モンテーニュに、カトリック教国の滅亡の指標だけではなく、おそらくは、人類滅亡のそれをも、示したのであろう。ここには、かれの歴史観がうかがわれる。アウグスティヌスの歴史が、神の都と地上の都との弁証法的な闘争を経た後に、神の都の勝利をもって閉じるのにたいし、モンテーニュにとって、歴史とは、傲慢の暗躍が人類の滅亡を導く過程である。他方かれは、人間が神に敬虔な信仰を奉げるとき、その《a) 素朴さが、われわれをわれわれの性状にのっとったもっとも幸福な状態に導く…》(547)もの、と考えるのである。素朴と傲慢との関係は、神への《c) 従順と服従》

1) Hauser, H., *La modernité du XVI<sup>e</sup> siècle*, Félix Alcan, 1930. p.13

2) Sée, H., Rebillon, H., et Préclin, E., *Le XVI<sup>e</sup> siècle*, P. U. F., 1950, p.107

(556) か、それへの反逆かの、つまり、「理性の2重性」に対応する対立関係である。それゆえ、人類を幸福にする歴史の進歩の動因は、両者の葛藤、その矛盾の解決、あるいは、両者の一方的支配の交代、ではなくて、おそらくそれは、神の思寵を宿しうる人間のある精神状況の拡大ないしは深化、すなわち、神への《'）単純な信心》(488)《謙讓さと服従》(540)の、そしてこれを用意する《無学》(540)《無知》(542)《単純》(555)の、拡大ないしは深化、そのものに機械的に求められている、と推測される。この非弁証法的な歴史把握が、カトリック支配の失墜と《カトリック信者と新教徒との間に日ごとに起った闘争でそれ(1561年以後のボルドー高等法院の記録—筆者)は満たされ…》<sup>1)</sup>た事実とから、かれをして、傲慢のなかに、人類を破滅させる力までをも読みとらせたのであろう。

#### IV 傲慢の態様

この傲慢は、具体的にどのような形をとったのであるか、かれによれば、宗教改革の原因をなした傲慢は、第1に、カトリックの定めた教義と異なる教義を語ることは、第2には、自己の尺度に合わせて捏造された諸条件による神のあらたな規定、つまり、人間と神との転位、をその具体的な態様とする。

《α)いかに人びとが、この種の不敬虔なことばを利用しているか、を見給え。現在われわれの宗教において行われている諸もろの議論において、もし、あなたがたが論敵をあまりに追いつめるならば、かれらはあなたがたに、神はその身体を天国と地上とに、つまり同時に多くの場所に置く力はないのだ、などと全く公然といい放つてあろう。》(589~590)このような言辞が、改革派の議論において、実際に出されたかいなかについての検証は、ここでの主題をそれる。モンテーニュが、この文脈に託したその意図は、むしろ、神にかかわることばの戯れ、ないしはことばの別の語義の探索、による神の冒瀆を例示して、これを告発することにある。それゆえ、《α)どれほど異端がそこ(ことばの語義の多様性—筆者)に充分な諸論拠と証拠とを見出して、もくろみ、自己を主張したことか、このゆえにこそ、そのような諸もろの誤謬の捏造者たち(auteurs)はことばの解釈に証明されたこの証拠から離れようとはしないのである》(660)とモンテーニュは述べるのである。改革派がことばの多義性にその主張の論拠を求めた、というのである。ことばに意義の多様性を認めるのは、《α)諸事物は種々な現象(lustres)、種々な意義(considerations)をもっている》(654)というモンテーニュの相対主義<sup>2)</sup>の基本命題に由来する。それなのに、なにゆえ、これを傲慢であるときめつけるのか。モンテーニュにとって問題なのは、ことばの多義性ではなくして、これに依拠して聖句にあたらしい意味を見出し、あたらしいキリスト像を発見した人間の態度であるから、である。ことばの多義性は、かれらに利用されたにすぎない。モンテーニュは、この人間の横柄な態度の具体的なあらわれとして、傲慢の態様としてのかれらの用いることばを、非難の対象に選ぶ。それは、原典の聖句に見出したカトリックの教義のそれと異なる意味を語ることは、すなわち、神の像を描きなおよす様々なことば、としてあらわれた傲慢である。それゆえ、このことばの多義性のうちに、モンテーニュが宗教改革の原因を求めた、と

1) Grün, A., *La vie publique de Montaigne*. Amyot, 1055, p.95, 次の書物からの転載。Jansen, F., *Sources vives de la pensée de Montaigne*, Aecan, 1935 の佐藤輝夫訳「現代人モンテーニュ」東京堂, p.55.

2) Villey, P., op. cit., T. II, pp.198, 207, 208, 210, 及び, Villey, P., *Les Essais de Michel de Montaigne*, Les Grands Événements Littéraires, Sfelt, 1946 (初版は Malfère, 1932), p.72.

解しえないのもちろんである。結局、ひとつのことばが、視角の差異によって、いくつかの語義をうむことは否定されえないが、それであるからといって、この事実をもとに、聖句に、教父のことばやその聖書解釈が定めた意義のほかに別の意義を見出し、この意味で、《不敬虔》なことばをたずねるのは、傲慢だ、というのである。

モンテニユのいう《傲慢》の第2の態様は、人間と神との転倒、である。《a》現在、われわれを圧迫している戦乱において、普通一般に諸事件が右から左へと変転していくのをわれわれはみている。…人間たちが、そこでは主人公 (conducteurs) であり、宗教を使っている。》(486) このことばは、16世紀後半におけるフランスの、人間の野心と陰謀とによってひき起された流血の継起、終幕の予見を許さなかった相つぐ諸事件、そして、これらによって象徴された社会的無秩序を、示唆する。

16世紀後半にいたると、1572年の聖バルテルミの大虐殺を機に、ユグノーは、従来のより純粋な信仰の自由の獲得から、その目的を、より政治的な反国王の主張をあらわにした運動に転換し、それに応じて各派の行動は、それぞれの信仰の守護にその正当化の口実を見出した政治・経済的な利害に支配され、以後の宗教戦争は、これに貫かれた。国王は、あるときはユグノー側に好意を見せながらも、絶対王権の最後の生成過程を急ぎ、領主階級は、旧教同盟を拠点にして既得の権益の確保に努め、ユグノーたちは、信仰の自由を政治・経済的に守るために、たとえば、ニーム、ラングドック、ギューイエンなどに自治的な解放地区<sup>1)</sup>を形成する。これら諸勢力による間断なき衝突は、いずれも、人の血を流し、しかもそれは、神の名においてなされた。それは、非世俗的であるべき宗教と階級的な利害との、まさに逆転である。この意味で、宗教戦争はイデオロギー闘争であった。

モンテニユは、この事実のうちに《a》われわれの宗教をわれわれの方法やわれわれの手によってうけいれていることのみならず(489)をみたのである。

このことは、モンテニユにとって、人間による神の規定、神へのあたらしい条件の附与、という事実に対応する。《a》神をわれわれの類推 (analogies) や推測 (conjectures) によって見抜いたり、われわれの能力やわれわれの法に応じて神や世界を規定したり、神がわれわれの自然的性状に分け与えたこの小さな基準 (eschantillon) を用いて、神をそこなうこと》(571) がそれである。かれは、ギリシヤの天才たちが語った神々、その哲学における第1原理に関して、人間のほどこした規定が、いかに《人間悟性の陶醉》(576) によるか、を語る。《a》われわれの条件から神々を作り出したこと、また欲望、怒り、怨恨、結婚、生殖、血縁関係、愛、嫉妬などを神の属性に帰したこと》(576) は、神への侮辱、不敬虔をこえて、人間悟性の陶醉としてしか考えられない、というのである。それは、神と人間との自己同一化の行為である。

なぜ、これが陶醉であるのか。モンテニユにとって、神とは《a》…万物、あらゆる善、あらゆる完全、の理解しえざる力、源泉、そして、その保有者…》(572) であって、人間の理解と想像の限界をこえた絶対性、完全性、至上善、そして創造力なのである<sup>2)</sup>。それゆえ、《a》神がかって人間に与え給うた最初の法

1) Sée, H., etc., op. cit., p.378, 松田智雄, 宗教改革, 至文堂, p.168. トレルチ, 宗教改革とルネッサンス, 内田芳明訳, 岩波文庫, p.38.

2) 神をこのように絶対化して人間との深い隔絶を語ることは、神と人間との媒介を司る人間である司教・法皇をその生命とした旧教と、モンテニユの宗教との異同をたずねる、ひとつの指標となるものであろうか。

は、絶対服従の法なのであった。》(540)そこには、神性と人間的なるものとの間に介在する深い断絶がある。このように、神が絶対かつ完全であるとき、不完全な人間がこの神に対峙する姿は、この神への反抗か、あるいは、モンテーニュの述懐するように、この神への絶対服従か、のいずれかである。神への反抗は、神と人間との間に人間の条件を背負った仲介物をたてることにおいて、あるいは、創造の具体化である人間に与えられた諸条件の否定のなかで実現される創造の否定、という救いのない戦いにおいて、遂行される。前者は、まさに、神の人間によるその絶対性の緩和への試みである。神があらゆる意味で人間を超越した完全性であるとき、人間が神の絶対性を緩和する試み、つまり、これを規定する試みは、人間と神とを転位するものであって、それは、人間の陶醉において、はじめて可能な人間の行為となるであろう。

しかし、モンテーニュは、直接に新教徒たちを指示して、かれらが神に、これらすぐれて人間的な諸属性を与えた、とは述べていない。事実、カルヴァンも、モンテーニュにおける神性の規定とのある類似を示して、神の絶対的支配と、人間理性の敗壞とを、厳しく指摘している<sup>1)</sup>。しかし、モンテーニュが糾弾しなければならなかったのは、その内容ではなくて、カトリックの教義を前にしたあらたな神の像の描出であった。《c)…神をわれわれの不徳な情熱と和解させるために…神の祭壇を罪のない動物だけではなく、人間たちの殺戮をもって満たすのである。a) 多くの国々、そのうちでもわれわれの国が、日常的な習慣によって行った、ところである》(581)と述べる文脈のうち、附加されたc)の文脈は、古典の批判に奉げられており、現実をしるすa)の文脈がこれに直結的に結合されている。したがって、このことばは、旧教派の不寛容を責めるものであるとともに、ギリシヤの天才たちがその天才にまかせて行った、人間による神の規定、つまり、人間と神との転倒、の姿を、そのまま、新教派によるあたらしいキリスト教の教義のうちにモンテーニュが読みとったことを示すことば、と解されるのである。

このように、モンテーニュにとっての古典の意味は、ソクラテスなど少数の哲学者の教えを通して、時代を生き抜く思想と勇気とを学びとるほかは、その批判において現実の批判を行うところにあった<sup>2)</sup>。かれは、人間と神との倒置を新教の出現にみて、これを人間の傲慢である、と規定する。

## V 傲慢と人間的理性

傲慢のこのような態様は、モンテーニュによれば、神の恩寵を欠いた人間的理性からうまれる。すでに示唆されたように、カトリック教会の定めた枠を越えることは、そのまま、神の恩寵を欠くことであり、これに類する行為を行う人間は、いずれも、傲慢である、とされる。しかし、問題なのは、なにゆえに、かれにとって、それが傲慢でなければならないのか、ということである。これを明らかにするためには、モンテーニュの捕えた人間の本質を明らかにしなければならない。そして、このときはじめて、傲慢が人間的理性に

1) カルヴァン、「基督教綱要」中山昌樹訳。新教出版、第2編、pp.229, 243, 244, 第3編、p.45などを参照。なお、カルヴァンは、モンテーニュの読書目録にも入っておらず、「エッセー」にもその名は見えない。それゆえ、直接的なカルヴァンからの思想上の系譜を探ることはできないが、モンテーニュはかれの思想をおそらく熟知していたであろう。

2) モンテーニュと Erasme, Rabelais などとの間にあるこの古典の意味の差異は、そのまま、その思想の差異を決定した重要な一因であろう。

基礎づけられる、とするかれの理解が明確にされるのである。

人間の本質とは、モンテニユにとって、どのようなものであるか。いかなる存在・事物といえども、その具体的な現実態において捕える以外にそれを把握する方法はありえない。かれは、人間の本質を描くにあたって、次のような前提条件を設定する。《a)…他からの助けを欠き、みずからの武器によってのみ武装され、そのあらゆる栄光・力、その存在の基礎である神の恩寵とその認識とをもたない人間そのものを考察しよう》(494) という前提を。

現実にかれがみた人間は、第1に、深い不安と悲しみに閉ざされている、第2には、人間のこの苦悩は、人間の本質の自己矛盾のあらわれである、第3に、人間の本質は、従来のそれと同じく、しかしいくつかの限定条件をもつ理性である、という3の視角に分析して捕えることができる。

モンテニユはいう、《a)…あらゆる動物のうち、人間ひとりが、想像のこの自由 (cette liberté de l'imagination) と思想のこの奔放さ (ce derangement de pensées) とをもっているために、それがかれに、在ること、在らざること、そして真偽、などを顕示してくれるのであるとしたら、それは人間にとって、あまりにも高値で買われた優越性である。それによって人間は、みずからにほとんど光栄を与えない。まことに、ここから、人間を圧迫する諸もろの悪の主要な源泉がうみ出されるのである。つまり、罪、病、迷い、困難、絶望などの》(506) と。ここでいう《罪…》は《a)…われわれは、われわれのものものとして、非恒常性、不決断、不確実、悲しみ、迷信、…不安、野心、貧欲、嫉妬、羨望、…諸もろの欲望、戦争、嘘偽、不忠誠、中傷、あるいは好奇心などをもっている》(538) と換言される。これら人間を写すことばは、おそらく、階級対立と宗教的対立とがからんだ血なまぐさい葛藤のうちで、当時の人間が曝した赤裸々な姿を示すことばであろう。また、人間の内的外的な支配体系をなしたカトリックの崩壊して行くのに対応して群生した、諸もろのあらたな価値観、そして、これら新・旧のいり乱れた諸価値観、の混迷に直面して、16世紀フランス人たちの小世界は、非恒常性、不決断、不確実、迷信、貧欲、好奇心などに捕えられて、たえざる動揺ををるしたであろう。しかし、これら人間の状況は、すぐれて、宗教改革とそれに続く宗教戦争とともに現出したものである。8次にわたって、ほぼ30年間<sup>1)</sup>、国土を荒敗させた宗教戦争は、これらを、おびたしい流血のうちに集約的に表現した<sup>2)</sup>。過敏なまでの鋭い感覚を通して豊かな受容性を誇ったモンテニユは、諸事件の継起に、人間の根深い不安が宿されているのを読みとり、それをこれらのことばに託して表現し、この人間の不安のなかに、16世紀の現実を結んだのである。一方で、このような根深い不安にさいなまれる人間を捕え、他方でかれは、他の諸動物と比較しながら、《a)…これら諸結果(動物たちの営為一筆者)に模倣によっても到達しえないばかりか、想像によってさえ、それらを観念することもできない》<sup>3)</sup>(517) 本来的に無能力な人間を描いている。しかし、これら両者は、別々の人間の姿ではありえず。

1) 1562~3, 1567~8, 1569~70, 1572~3, 1574~6, 1577, 1579~80, 1585~93, Sée, H., etc. op. cit., pp.372~383, 及び, Chartrou-Charbonnel, *La Reforme et les Guerres de Religion*, 1948, C. A. C., pp.190~199.

2) この悲劇は、1夜にして、ほぼ3000人、その後、全フランスではほぼ10000人のエグノーを殺戮した1572年8月24日の聖バルテルミの大虐殺に、象徴される。これは、時のローマ法皇・グレゴリウス13世の祝福を受け、メダルとなつて記念された。

3) モンテニユは、人間・動物比較論の結論として、自然に包擁されたすべての被造物はすべて平等な能力を与えられている、と述べる。これを不平等にしたのが、人間の傲慢である、とする。

いずれも、同じ原因の同一の結果である。

傲慢は、宗教改革の原因となったばかりではなく、宗教戦争を通して、それがこのように、人間に復讐をする、のをモンテーニュは知った。《c》傲慢 (cuider) からは、あらゆる罪悪がうまれる…》(541) し、《c》不信仰な人間たちとその諸行為とは、いたる所で、それにふさわしいあらゆる出来事に出合った》(571) のである。この認識は、おそらく、キリスト教的な発想に支えられてえられたものであろう。神の名において、人間たちが自己の野心の成就をはかり、自己の利害を正当化した果報が、人間の苦悩とその生の脅威であった、とかれは洞察する。かれが現実にもいた人間の悲惨な姿は、人間の本質の、《想像のこの自由と思想のこの奔放さ》の現実化、としての現実態である。神の恩寵を欠く人間的理性は、宗教戦争が犠牲に供した人間の血がこれを顕示するように、自己矛盾に陥る。この人間否定こそ、傲慢による人間への復讐のあらわである。人間の、自己自身の対象化である宗教改革は、宗教戦争を呼び起こして、人間を肯定せずに、人間を否定する。

人間が自己自身を対象化する本質は、《想像のこの自由と思想のこの奔放さ》である。モンテーニュは、これを神の恩寵を欠いた人間的理性である、と規定する。この規定は、どのようになされるのであるか。

かれは、他の諸動物との対比において、《a》われわれは、想像し幻想する資産 (biens imaginaires et fantastiques) や未来の存在しない資産 (biens futurs et absents) をわれわれのものとしている》(537) という。先に述べた人間の本質は、ここで、biens imaginaires, fantastiques, futurs et absents と換言される。モンテーニュの語彙では、fantaisie と imagination とは同意義をもつ<sup>1)</sup>から、biens imaginaires et fantastiques は、人間の属性としての imagination に等しい。《未来の存在しない資産》は、《在ること不在ざること》を人間に与える imagination の生産物である。すなわち、モンテーニュにおいては、人間の本質は、まず、imagination である。

この imagination は、présomption と共通した機能をもつ概念を荷わされている。《a》真実のところ、自然は、われわれの悲惨かつ力弱い存在を慰めるために、われわれに présomption だけを分け与えたように思われる。…われわれは、風と煙とだけを分け与えられているにすぎないのである。われわれが、われわれの imagination の諸力を価値あらしめるのは、もっともであった。》(541) Présomption は、モンテーニュにとって、人間の病であり、しかも、この病は、naturelle にして originelle なのである (497)。これは、présomption が、人間にとって、不可分離の、生来の属性である、ことを意味する。したがって、この文脈は、第1に、présomption が人間の本質である、ことを示す。第2には、imagination が présomption とほぼ同意義をもつ、ことを明らかにしている。つまり、imagination と présomption とは、それぞれ、《在ること不在ざること》と《風と煙》とに対応する。両者の同義性は、次の2の文脈におけるほぼ同じ意味内容と文章構成とによっても証明されている。《a》…同じ imagination の空虚さによって、人間は、みずからを神と等しくし、みずからに神の諸条件を帰している。》(498) 《a》われわれの présomption の空虚さは、われわれの能力を神に帰するより、われわれの力に帰する方を好ませる。》(507) すなわち、両者は、その空虚さにおいて同一であり、それによって、いずれも、人間にその自己信頼を与える。モンテーニュにおい

1) Montaigne, *Essais, extraits*, T. II, *Le philosophie*, éd., par Pangaud, R., Classiques Larousse pp. 32, 33.

て、*imagination* が人間の本质であるとき、*présomption* も、同じく、人間の本质である。

それならば、*imagination* は、*présomption* と全く同意義なのか。おそらく、前者は後者のうちに包摂されて、後者をうみ出す過程に作用する人間の能力なのである。

*Présomption* は、*présumer* する行為、つまり、確実な証拠にもとづかない判断をその第1義とし<sup>1)</sup>、この不確実な判断が固持されるとき、それは我執とかわり、第2の語義、自分勝手な意見、傲慢、をうむ。判断が確実な証拠にもとづかないで下されるとき、それは、事物を正しく判定する判断ではありえずに、モンテニユが指摘するように、そのいずれとも明らかでない《在ること不在らざること…真偽》を人間に与えるある事物の見せかにもとづいただけの判断であるから、これは、その事物に関する正・誤いずれともつかない判断に終る、という意味である。他方、*imagination* は、このような判断を導く能力である。つまり、皮相的な事物の観察がまずあり、これにもとづいて、*imagination* の能力を働かせて、人間は、*présomption* をうる。その結果は、ある事物に関して、誤っている可能性をもつ判断と、同時に、同一の事物に関する種々相異なった判断、である。*Présomption* の同義語とされる *conjecture* は<sup>2)</sup>、モンテニユにおいても、それに代つて使われる (571) が、むしろ、*imagination* が多くこれを代行する。

モンテニユのいう人間的理性は、まさに、これらを、その規定内容とする。かれは《a) 各人が自己のうちに捏造するこの見せかけの理性 (*cette apparence de discours*) を、わたしは、常に理性 (*raison*) と呼ぶ》(635) と証言している。続けて《この理性のその条件から、ある同一の主題に関して、何百とない正反対の見方がありうる》という。これは、カトリック教会の教義に従わないと《a)…たちまちにして、理性のすべてが失われて、戸惑い枷をはめられるかのように、人間の諸意見がこの巨大な荒れ狂う海原のなかで舵もなく目標も失って、くるくる回り漂って波打つ…。…理性は、ばらばらになって、様々の何千ともない途に散逸する》(580) ということにほかならない。人間の本质である理性は、このように、*imagination*、*présomption* に代替されうるようなものである<sup>3)</sup>。このとき、人間の理性は、人間の諸見解を相対立する混沌に落とし入れるだけではなく、《a)…あまりに微力かつ盲目であるから…充分に明白であるような平明な事柄はひとつもない…》(494) ことになる。人間的理性のこの無能性は、さらに、感覚批判<sup>4)</sup>を通して、示される。

この人間的理性に関するかれの規定は、諸思想のつぼと化した16世紀の現実の姿に、かれが鋭敏に感応したことを示す、とともに、当時の状況を、ある視角から、雲りなく映すものである。モンテニユにおける人間の本质は、*imagination*、*présomption* に置きかえられうる理性であることが、明らかにされる。なお、この《理性》で例証されたように、モンテニユの《思想は、表現が様々なヴァリエーションを通して美

- 1) Littré E., *Dictionnaire de la langue française*, 及び, Larousse Du *XX<sup>e</sup> siècle*, T. 5<sup>e</sup> による。
- 2) 1) に同じ。
- 3) このことは、日本語訳として、*présomption* に「うぬぼれ」、「傲慢」を与えることの非妥当性を明らかにする。適正な訳語は見当たらないが、おそらく造語としての「妄断」がもっとも近いものと思われる。
- 4) *Essais*, par Thibaudet, A., op. cit., pp.663~679.

化されて行くにつれて、それだけ、明確さと深さを増す<sup>5)</sup>のである。

人間的理性は、カトリックの教義の論証に奉仕するという伝来のスコラ哲学が与えてきた理性の機能に背を向けて行使されるとき、それは、真実を把握するあらゆる能力を失う。ここにはじめて、モンテーニュにおいて、傲慢が、神の恩寵を欠いた人間的理性に基礎づけられる、ものであることが明らかになる。人間の本质である *présomption* の第2義である傲慢 (*orgueil, fierté*) が、ここに生まれる。傲慢とは、人間的理性の無根拠性である。

結局、宗教改革と宗教戦争とは、この傲慢を基礎づけた人間的理性に起因する。それゆえ、モンテーニュは、《a) (人間の) いかなる理性といえども、もうひとつの理性 (神の恩寵ないしはこれを宿した—いずれも筆著) がなければ確立されないであろう》(679) といわなければならない。

モンテーニュにおける現実認識の構造は、以上に明らかにされたように、理性の2重性による把握のうえに築かれている。(7. 10. 62)

---

5) Strowski, F., Montaigne, Félix Alcan, 1906, p.14.